



「Let's do Theology!」

小橋口貴人(中部中会 那加教会牧師)
本学非常勤講師

昨年から非常勤講師として1年生の「新約概説」という科目を担当しています。牧会の現場に出て、日々の学びが疎かになっている私を、神さまが神学校に連れ戻したのだと感じています。「教える機会を与えるから、まずはあなたがちゃんと学びなさい。学び続けなさい」と。

神戸改革派神学校に入学した当時、私は他教派の所属でした。当然知り合いはほとんどなく、知っている先生も一人もおらず、ただただ不安を抱いて入学しました。そんな私にとって、神学校は多くの恵まれた出会いの場となりました。クラスメイト達との出会い。先生方や職員さんたちとの出会い。改革派教会との出会い(多くの教会でお世話になりました)。そして神学との出会いがありました。

「神学(Theology)」とは、「神(Theos・θεος)」と「言(Logos・λογος)」の二つの語が組み合わされたものであると、入学後のガイダンスで吉田校長から教わりました。そのときから、「神からの言葉」を聞くことも、「神についての言葉」を学ぶことも、「神への言葉(祈り、賛美、信仰告白)」を語ることも、すべてが神学の営みであると理解しています。すなわち、神学とは、今も生きて働いておられる神を知っていくという営みであり、神と日々出会うことに他なりません。新約聖書の授業を担当しながら、決して一冊の聖書には納まりきらない神さまの広さ、

長さ、高さ、深さを感じるがあります。それこそが神学であると改めて感じています。学べば学ぶほど、自分が何も知らなかったことを知らされます。

この神学の営みは、決して神学校にいる者たちだけのものではありません。ある本に紹介されていたカール・バルトの言葉です。

「神学は神学者だけの個人的な課題ではない。それは神学部教授たちの個人的な課題でもない。幸いなことに、大半の教授たちより神学についてよりよく理解した牧師たちが、いつの時代にもいたのである。しかし神学は、牧師たちの個人的な研究課題でもない。幸いなことに、牧師たちが神学的に幼児であるか無教養人であった時、熱心に神学を追い求めた教会員が繰り返し現れたのであり、時には全会衆がそうであった。神学は教会の事柄なのである。」

生活の場で、生ける神の言葉を聞き、考え、確信したところに留まること。神学の営みに皆が招かれています。神への言葉が豊かに語られる教会の歩みのために、少しでも仕えることができれば幸いです。お近くの方はぜひ神学校の授業を聴講してみてください。遠くの方も、オンラインなどの利用を通して共に学ぶ機会が提供されることを願っています。

「Let's do Theology!」

卒業生挨拶



本科課程(4年制)卒業

川端 達哉

(かわばた たつや)

日本同盟基督教団
松原聖書教会伝道師

卒業式から早2ヵ月が経ちました。4月より、日本同盟基督教団・松原聖書教会にて伝道師としての働きを始めています。

教会事務室内にある私のデスク周りは今、沢山の本で埋め尽くされています。『改革派教義学』、『ウエストミンスター大・小教理問答』など、神学校入学前には全く縁の無かった数々の本に囲まれ、毎日楽しく学びと奉仕に勤しんでいます。

神学校では「神学する」という考え方について教えて頂きました。そして、生きた教会こそ、まさに「神学する」現場であることを、日々実感しながら過ごしています。教会の営みとは、どこまでも人間の営みです。しかし同時に、教会こそ神様が臨在され、神様が導かれ、神様の祝福に溢れる場所です。教会の営みの中で、如

何にして神の御業を見出し、神の主権に身を委ね、神に栄光を帰するか。このことを考え抜き、実践することが、「神学すること」ではないだろうか、と自分なりに考えている今日この頃です。

5月初旬の未明、教会内に不審者が侵入し、器物損壊の被害を受けました。教会創立50年の歩みの中で、初めての出来事でした。警察に被害届を提出し、慣れない事後処理に追われる中、ふとサウロの元に遣わされたアナニヤのことが思い出されました(使徒9:10-22)。「不審者どころではない、愛する兄弟たちを殺戮した極悪人サウロの元に遣わされたアナニヤの葛藤とは、一体どれ程のものだっただろう。自分がもしこの不審者の元に遣わされたら、果たして彼のために祈ることが出来るだろうか」。そもそも犯人がどこの誰かも分かっていない状況ですが、このような出来事の背後にも神様の主権があることを覚え、御旨の実現を願う祈りを捧げました。

現実的な困難のただ中を歩む教会にあって、神の言葉を高く掲げ、現実のただ中に働かれる神の御業を見出していく。神学校で教えて頂いた「神学する」という生き方に、これからもう強く留まり続けたいと願っています。



本科課程(4年制)卒業

蔣 淳吉

(ジャン スンギル)

西部中会
園田教会 定住伝道者

2023年3月に卒業し、4月に定住伝道者として園田教会に就任しました蔣淳吉と申します。

今の私は、卒業して神学校から完全に離れて新しい生活を始めた、というよりは、むしろ、その延長線上にいるような気がします。実は、神学校の吉田隆校長が園田教会の代理牧師となられたおかげで、現在、たくさんのご指導を頂いています。また、園田教会はかつて、神学校の学監であられる袴田先生が長年にわたってお働きになった教会ですが、赴任して間もなく、袴田先生から洗礼を受けられた会員の方が召天されました。そこで、ご遺族へのお見舞

いに袴田先生に同行して頂き、未信者のご遺族にどのように対応すればいいかなど、教室の中ではなかなか学べない実践的なことを学ばせて頂きました。牧会者としては新米である私が、このようなかたちで卒業後も神学校の先生方に支えられていることに、ただただ感謝しております。

4月から毎週、説教者として講壇に立たせて頂いておりますが、ふと、何年か前に、ある先生から聞いた言葉を思い出しました。「説教者は、講壇に立って説教をする間は、消えなければならない。」説教を説教たらしめるのは、けっして説教者がどれほど偉い人物かではない。説教者の声や、語り口が良いかでもない。

ただ、説教者が「神の言葉の権威」、その言葉が持つ「上からの力」を本当に信じ、純粋にその権威のもとで語って初めて、説教は本当の説教として成り立つ。だから、毎週、講壇に立つ私という者は、何者かであるわけではない…。その先生がおっしゃった「説教者は、講壇で消えなければ」という言葉は、そのような意味だったのではないかと思います。

本当に未熟で、高慢になりやすい弱い者ですが、自分の賜物や、その他、人間的な要素に頼ることなく、ただ、神の言葉そのものの権威、力を信じ、そのもとで大胆に語る説教者として用いられたいと切に願います。



本科課程(4年制)卒業

曹 在佑

(ジョ ジェウ)

東部中会

光が丘キリスト教会

定住伝道者

主の御名を賛美いたします。今年の3月に神戸改革派神学校を卒業し、4月から東部中会の光が丘キリスト教会に定住伝道者として赴任いたしました。早いもので2か月が経ちました。

光が丘キリスト教会は、インド、台湾、中国、米国、日本、韓国など様々な国の出身の方々が集い、キリストにあって一つの家族とされている教会です。教会に集うお一人お一人との交わりはいつも楽しく、喜びに満ちていて、神様がすべての人を素晴らしく創ってくださり、お一人お一人を豊かに祝福し、導いてくださっていることを感じています。光が丘キリスト教会の皆様と共に、神様の愛と祝福を豊かに受けながら、イエス様に似た者へと成長することができればと願っています。

さらに、東部中会や埼玉西部地区の教会の交

わりにあたたく迎えていただいていることを感謝しています。交わりや勉強会などを通して、牧会の先輩方から多くのことを学び、また、励まされています。これからも近隣教会の皆様との交わりを深めながら、地域に仕えたいと思います。

このように祝福の内に牧会者としての歩みを始めることができたのは、神学校在学中に学び、経験したことのおかげだと思います。神学校で受けた授業や諸教会での奉仕などを通して多くの恵みをいただき、召命感が一層強められました。そのすべてが牧会者としての働きに必要な準備であったのだと改めて思っています。そして、在学中、体調を崩した時に、先生方、職員、神学生、諸教会の皆様が、親身になって祈り、励まし、支えてくださったことを思い起こしながら、日々教会の皆様と向き合っています。

これからますます牧会者として成長し、宣教と牧会の業に励みたいと願っています。引き続き光が丘キリスト教会と東部中会をお祈りに覚えていただければ幸いです。神戸改革派神学校の歩みを主が豊かに祝福してくださり、また、多くの献身者を起こしてくださいますように、お祈りしています。



本科課程(2年次編入)卒業

徐 亥貞

(ソヘジョン)

日本同盟基督教団

播磨キリスト教会

伝道師

主の御名を賛美いたします。

神学校を卒業してからあっという間に3か月が経ちました。皆様にご挨拶できる機会が与えられていることを感謝いたします。私は今でも神学校の様子が昨日のように目の前に浮かんでおり、先生方や職員の方々にお世話になったこと、また諸教会の皆様のお祈りに支えられていることを感謝して歩んでいます。私の場合は教団が異なり(日本同盟基督教団播磨キリスト教会)、中々お会いできなくなっていますが、主にあって同じ信仰の仲間として覚えて祈っています。

私は所属教会で伝道師として、牧師を補佐しながら日々福音伝道に励んでいます。また、

これまで牧師の仕事をしながらか支えてくれた夫と思春期に入った中学生の息子と一緒に過ごす時間を豊かに与えられています。卒業後、4月と5月は体調が優れず、しんどい日々を過ごしていましたが、感謝なことに6月に入ってから健康が取り戻され元気よく楽しく歩んでいます。

最近私は、福音伝道者として神学校に入る前の自分と卒業後の今の自分との違いに気づき、自分でもビックリして不思議に思っています。正直、体力的には段々と自信がなくなっていますが、霊的な面においては、ゴールに向かってより単純で真っ直ぐに歩んでいることを感じています。そのために私は今日も明日も時が良くても悪くてもこの福音の種まきを続けてやっていこうと思っています。何一つ優れたものをもっていない未熟で足りない者であっても、私を召し出してくださった神に信頼し、その神にすべてを委ねていきたいと思ひます。これからも引き続きみことばを語り、またみことばを行う者として歩み続けたいと願っています。今後どうぞ、よろしく願いいたします。



特別研究課程

(1年間)卒業

白井 仁

(しらいひとし)

日本長老教会所属

私は今、東京でディアコニアの働きのボランティアをしながら、牧師の招聘を待っています。具体的には、日本長老教会東関東中会の千住キリスト教会の給食伝道礼拝ミニストリーのお手伝いをしています。給食伝道礼拝では、荒川の千住大橋の下で毎週水曜日のお昼に、集まって来てくださる90名ほどの兄弟姉妹たちと一緒に礼拝をささげ、一緒に食事を分かち

合います。この礼拝の食事や、全国から献品された衣服などの準備のために前日の火曜日にも奉仕があります。私は毎週この火曜日と水曜日の奉仕の両方のお手伝いをさせていただいています。水曜日の橋の下での礼拝に集まる兄弟姉妹たちは、住所のない方、定職のない方、心身の健康に問題を抱えた方、生活保護に頼らざるを得ない方、家庭に問題を抱えた方など様々な方々がいます。少しずつ、それぞれの方とお話し、仲良くなる中で、様々な祈りの課題を教えられています。日曜日の礼拝には敷居が高くて行けなくても、この橋の下の礼拝には来れる、という方もいます。教会の宣教にとって本当に大切な「伝道礼拝」だと実感します。橋の下の礼拝と食事に来てくださる兄弟姉妹たちとの交わり、触れあいばかりでな

く、一緒に奉仕させていただく教会の兄弟姉妹たちとの交わりも、私にとって大きな恵みです。長老教会の様々な教会から、また地域の他教派の教会から、それぞれの時間や、賜物に合った奉仕に集まります。火曜日の準備の日の奉仕者は、千住キリスト教会の牧師先生と私以外は年上の姉妹たちです。この時間は、ステファン先生の牧会ケアで習った傾聴のテクニクを実践して、姉妹たちの色々なお話を聞きな

がら、教会のこと、信仰者としての長い人生の歩みのこと、家庭での証の生活についてなど教えられています。給食礼拝で最近一番うれしかった事は、五月末に久しぶりに説教の奉仕をさせていただいたとき、食事の時間に数名の兄弟たちから「俺、先生の説教好きだよ」「先生の説教聞けるのはここだけだな」と声をかけていただけたことです。

新入生挨拶



本科課程(4年制)入学

田好 愛基

(たよし あいき)

東部中会

江古田教会所属

主から召し出され、神戸改革派神学校への入学がゆるされましたことを心から感謝いたします。献身の思いが与えられたのは大学2年生の時でした。ちょうどコロナ禍が始まった頃です。それまで生きてきた20年間で初めて、教会に行けないという経験をしました。ようやく教会に集まったの礼拝が再開されたとき、その礼拝で今までに感じたことのない喜びが湧き上がってきたことを今でも覚えています。これが一つのきっかけとなり、この喜び、恵みを伝える牧師になりたいという思いが私に与えられました。コロナ禍という試練をも用いてくださった神の大いなる御業を覚えます。

しかし、大学2年生で献身の思いが与えられてから、それが神からの召しであるという確信を得られずにいました。いや、召命の確信を得た後でさえ、その確信が揺らぐこともありました。そんな中、たくさんの方々がわたしのために祈って下さいました。私に与えられた召命は、この祈りによって確かにされてきたことを強く実感しています。私が献身することが主の御心であると、私だけが信じているのではなく教会の兄弟姉妹が信じている。それどころか、私が確信するにも増して信じていることに大きな励ましを受け、いよいよ召命の確信が強められました。これからみなさまの祈りに支えられながら、私に与えられている召命を常に確認しつつ、その召しに忠実に仕えていきたいと祈ります。





本科課程(4年制)入学

牧田 創

(まきた はじめ)
東北中会
仙台教会所属

私は大学を卒業後、キリスト教主義学校で25年間英語教師として過ごしました。今年で51歳になります。キリスト教主義学校の教員であったことは、私にとって大きな意味を持っています。そこで聖書について生徒に話す機会が与えられたからです。キリスト教主義学校とは言え、ほとんどの生徒は聖書に馴染みがなく、信仰を持っていません。だからこそ朝の礼拝のお話のために、私なりに一生懸命準備をしました。考えたことは、私自身がまず、聖書が示す喜びに聴くことでありました。そこで自分が受

けた喜びと励ましをこそ、生徒に語りたくて願いました。そして礼拝で生徒に語る言葉を準備する中で、最も励ましと喜びを受けてきたのは、他でもない私自身でした。

教師としての日々はまた、神の前に自分がいかに貧しい存在であるかを、繰り返し私に教えてくれました。自らの貧しさを突きつけられることは苦しいことです。けれども同時にそれは、このような貧しい者が神と共に歩むことができる喜びと恵み、そして悲しみや苦しみの中にあっても主において喜ぶことができることを私に教えてくれました。

今私の前には歩むべき道が一筋示されていると確信します。それは私を確かに導き、喜びを与えてくれる御言葉に聴き続ける道です。その御言葉を、自ら喜びをもって伝える道です。私にどれだけの時間が残されているか分かりません。しかし神にこそ信頼し、与えられた思いのままに歩みたいと願います。



本科課程(4年制)入学

山口 英俊

(やまぐち ひでとし)
中部中会
豊明教会所属

はじめまして。今年4月に神学校に入学いたしました山口英俊と申します。所属は中部中会豊明教会です。

今年8月で還暦を迎えます。35年間勤めた公務員を早期退職し、第二の人生を神に捧げることは最高のやりがいと、意気込んで神学校にやってまいりましたが、まもなく「やりがい」だけでは立ち行かないことに気付かされました。やりがい感は結局自己実現です。神の前に立つことは、自分が頼りとしてきたもの(強力な自我)がことごとく崩されることであり、自己実現からくる満足感とは正反対の状況に立

たされるのです。自分自身が剥き出しにされることは辛いものです。できれば見たくない自分の暗い部分に否応なく直面させられるからです。それまでより頼んできたものの一切が神の前では役に立ちません。果たしてここに来てよかったのだろうか、でも引き返せない、行くしかない。なんとも心細い状況に陥りました。そんな中、ある日のチャペルの説教で、「主のもとで、わたしたちは安心して崩れ落ちることができるとのメッセージに大いに慰められました。献身者として全く相応しくないと私ですが、今ここに自分がいるというのも現実で、そこに神の御手を覚えることができたのです。弱さも愚かさも含めて、私という者を神学生として主が受け入れてくださっているという安心感です。この限りなく優しい主の懷に抱かれ、学びと訓練を続けることができている。神学校を覚えて祈ってくださっている皆さまに感謝いたします。これからもどうぞよろしくお願いいたします。



特別研究課程
(2年間)入学

李建昌

(り こんちゃん)
四国中会
宿毛伝道所所属

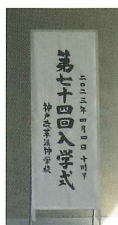
特別研究生として入学しました李建昌と申します。私は40歳の時にイエス様を信じてクリスチャンになりました。救われてから人生の目的が変わり、福音を伝える使命の道へと導かれました。日本語が話せることもあって、母教会の日本語礼拝部で奉仕するようになりました。2006年、大阪で夏季短期宣教の経験をした後、コリント二9:19の御言葉によって日本宣教へのビジョンを持つようになりました。

宣教の道への神様の御計画は、まずは中国への宣教師としての4年間の働きにありました。宣教訓練と宣教地での経験は長期宣教への召

命を固くする貴重な時間になりました。韓国への帰国後神学校で神学を学び、再び海外宣教への道を祈りました。神様の導きによって、韓国の教会の派遣で私たち夫婦は4年前に大分市へ到着し、2年間は地域の日本人教会で協力宣教師として働きました。

私たちの日本宣教への方向性は、地方伝道・無牧教会での奉仕にあります。神様の御備えを求め四国地方の宣教状況をリサーチする中で、宿毛伝道所との出会いができました。去る1年間は宿毛伝道所の教会員として地域伝道もしながら、改革派教会について学びました。宿毛伝道所と清水伝道所の皆さんから沢山のご指導や教え、お祈りで支えられています。

今後は、改革派教会で福音宣教の働きを続けていきたいと願っています。神の国を拓げるための良き準備の期間になるように、一緒に祈ってくだされば幸いです。



全校祈祷日



2月3日（金）に神学校では全校祈祷日の時を持ちました。今回は千里摂理教会（大阪府）の吉田謙先生が立てられ、「主に導かれて」と題して講演して頂きました。その中で印象に残ったことを書かせて頂きます。

“今自分にできることを精一杯すること”ということが吉田謙先生のモットーだと伺いました。「主が期待しておられることは、一タラントンを預かった私が二タラントン分の仕事をするのではなく、一タラントン分の仕事をしっかりとやり遂げること」とお話し下さり、神様が必要なものを備えて下さること、また与えられた中で誠実にあることの大切さを覚えることができました。講演を通して、神学生一人一人も各自に与えられた召命と何を主からお預かりしているのか、具体的に思いを向けることが出来ました。そして先生はそのタラントンをを用いて、個人訪問を重んじ、一人一人への魂への配慮をされ、それ以外にも様々な形で交わりを深め、祈りの課題を共有されていることを伺いました。実践的なお話しによって、牧会

者の姿を思い巡らし、そのことによって自らをも問う、大変有意義な学びの時となりました。

そしてこの全校祈祷日のもう一つの目的は、全国の改革派諸教会のために祈りを捧げるということでもあります。中会あるいは各教会からの祈祷課題を皆で共有し、思いを一つに致しました。今回も祈りつつ、とりわけ覚えさせられたのは、全国に牧者のいない教会が多くあるということです。神様の計画への思いを馳せつつ、相応しい時にふさわしい牧者があたえられますようにと祈りを捧げました。また私たちの神学校もそのような神様のご計画に用いられますようにと祈りを深めました。諸教会から頂いた祈祷課題には、神学校への励ましのお言葉もありました。改めて諸教会の祈りの中で、わたしたちの歩みがあるということを知る時ともなりました。

豊田真史（本科課程3年生）

春の信徒神学講座



5月6日と5月13日、小橋口貴人先生による「やさしい新約概説」が開講されました。小橋口先生は神学生時代、園田教会へ1年間派遣されましたが、当時はまだ他教派に所属されており、改革派教会の牧師先生になってほしいと私は密かに祈っていました。その小橋口先生が改革派の教師となり、神学校の講師となり、こうして再び園田教会に来て下さるとは！

「新約概説」は神学校で1年生が1学期から受ける授業で、新約正典学、新約本文学、新約緒論、神学釈義などの「新約学」の入り口であり、新約聖書の全体をざっと見渡すものと言えます。

1日目は「聖書の時代背景を学ぼう」でした。旧約聖書と新約聖書は、例えば旧約には馴染みのない言葉（異邦人、会堂、律法学者…）が新約には出てくるなど、全く違う世界になっているわけですが、そもそも旧約と新約の間には400年もの空白時代があるのです。中間時代、また第二神殿時代とも言われるこの間に何があったのか。ヘレニズム時代には、言語や文化がことごとくギリシ

ア化されました。聖書（旧約）はヘブライ語ですが、それを読めないユダヤ人が多くなったため翻訳されるようになりました。異教化に強く対抗した人々ハシダイ（パリサイ派の源）が大迫害に遭ったことが外典（「マカバイ記」）には書かれており、旧約聖書外典は中間時代の出来事や信仰を知るために役立つものだとわかりました。

2日目は「福音書の成り立ちを学ぼう」でした。最も早く書かれたのは「パウロの手紙」で、福音書はパウロの死後に書かれたものです。初代教会には新約聖書はまだありませんでした。その中でそれぞれの教会が、主から直接聞いた人・主を直接見た人の証言を辿って、「神の言葉」として少しずつ採用し、保存していった。全部揃っていなくても、各々は違っていても、そこに統一性があったのは「同じ聖霊」が生み出したものだからです。福音書は歴史書なのか伝記なのか。福音書には署名がありません。福音書そのものが「福音」であるという言葉がとても印象的でした。

谷口基子（園田教会会員）

リトリート



神戸改革神学校2023年リトリートが、三木市にある「コープこうべ協同学苑」を会場にして行われました。昨年からは場所を変えてのリトリートが復活しています。テーマは「与えられた召命と使命—青年伝道」。5月18日(木)から1泊2日の日程でした。

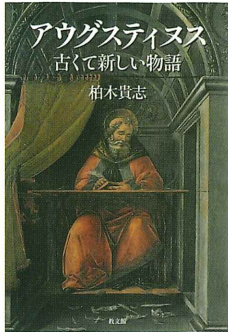
今年講師としてお招きしたのは、CRCより派遣されているケン・リー先生。東関東中会の青年伝道で活躍されている先生として、ご存じの方も多いと思います。私は初めてお目にかかったのですが、その声、その笑顔、その風貌から、何だかずっと前から知っているような、どこかでお目にかかったことがあるような、懐かしいような、最初からそんな気持ちにさせられました。先生は、2つの講演の1つで「キリスト者には必ずある賜物」のことを教えてくださったのですが、先生ご自身が聖霊の賜物を豊かに受けられている方であると思われました。

私がケン・リー先生から教えていただき恵まれたこと。それは「霊的トレーニング」における「5つの確信」でした。この5つの項目を、先生は青年たちの前に立つ者が霊的に整えられることを想定して語ってくださったのですが、より根本的に伝道者としても、キリスト者としても大事な項目ではないかと思い、皆様と共有できればと願います。それが「1.救いの確信」「2.祈りの応答の確信」「3.勝利の確信」「4.赦しの確信」「5.導きの確信」です。これら5つを先生は御言葉を取り上げながら、「あなた、『救いの確信』がありますか。あなた、『祈りの応答の確信』がありますか…」と項目ごとに問いかけながら、力強く丁寧に教えてくださったのです。先生ご自身がこの素晴らしい「確信」を与えられて青年たちを導いてこられたのだと思うと、先生に導かれた多くの青年たちの幸いを感じずにはられませんでした。ケン・リー先生から私たちは善き賜物をいただきました。主のために活かしていきたいと願っています。

服部宣夫(本科課程3年生)

『アウグスティヌス:古くて新しい物語』

- 著者: 柏木貴志
- 販売価格: 2,800円+税 (教文館、2023年)

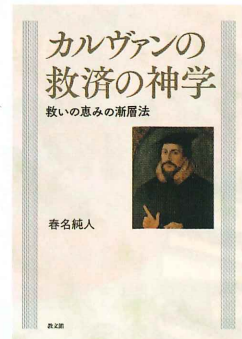


本学気鋭の講師であられる柏木貴志教師による、歴史文献と資料を基に紀元4世紀から5世紀にかけて活躍したアウグスティヌスの生涯に迫る歴史小説です。古代教父アウグスティヌスとその周りに生きた人々が、時の隔たりを感じさせない臨場感をもって、本の中で生き生きと躍動しています。アウグスティヌスについてのこの種の迫り方はとても新鮮で、他に類を見ないものです。著者はアウグスティヌスを「友人」と呼びますが、読み手もその近さでアウグスティヌスに出会い、その声を聴くことができます。柏木先生が神学校で担当しておられる「古代史」の講義にも俄然興味が沸いてきます。

『カルヴァンの救済の神学:救いの恵みの漸層法』

- 著者: 春名純人
- 販売価格: 3,800円+税 (教文館、2023年)

90代に迫ろうとされている春名純人関西学院大学名誉教授が、背骨の手術からの退院後、コロナ禍中の3年間を費やして書き上げられた渾身の力作です。本書は、カイパー、ジョン・マーレー、そしてカルヴァンの注解に基づく、ローマの信徒への手紙8章後半部分の釈義というかたちを取っていますが、これは逆境の中を神に支えられて如何に生きるかという、春名先生の哲学博士というよりもむしろ一人の信仰者としての信仰告白であり、御言葉への感謝と感動と救いの希望の「漸層法」(言葉を繰り返しながらより強い言葉によって究極的目的まで上昇していく修辞学的表現方法)に満ちた説教でもあると言えるのではないのでしょうか。



神戸改革派神学校の出版資金援助を用いて、上記二冊の本が出版されました。両書共に、著者の牧師としての、また哲学者としての信仰的実存を賭した気迫が込められています。日本キリスト改革派教会の豊かで多彩な賜物を、この二冊の著書を通して是非味わっていただきたいと思えます。(吉岡契典)

神戸改革派神学校

2024 年度新入生募集案内



激しい時代の変化の中で、変わることはない神の国の福音の希望を伝えるために、あなたの人生を主に献げてください!

本科課程 (4年制)

教職養成課程です。ゆとりある充実した授業とともに実践面を強化します。

★ 願書締め切り

2024
1/10(水)

短期課程 (2年制) (4年制への編入も可能)

教会に献身する信徒のためのコース!
信徒説教者・信徒リーダーなど教会献身者の神学教育のために。

★ 入学試験

2024
2/13(火)

特別研究課程・ 聴講制度あり

まずは
お問い合わせ
ください。

